

二月には当山善入院、御本尊様 一光三尊善光寺如来様の御開帳も無事嚴修でき一安心です。健康でありさえすれば又、十二年先の御開帳の御縁を頂けます。この世は生々流転、生き死に」の繰り返しです。身の処し方次第で三悪道に墮ちる事もあるようです。何事も縁を結んでいくと云う事は良縁でなくてはいけません。それは結ぶという字を見れば分かります。糸偏に吉と書きます。即ち、善悪の善、吉の結果を求めたいからでしょう。結縁法楽」なのです。

ヨガとは瑜伽行派の修行態だと思つています。仏教で唯識」と云い、生きる本質を知る事、そして実践する事でしょう。たまには仏間で静かに座し、目を半眼にして、ゆっくり鼻から空気を取り入れ、ゆっくり口からはきだし、心の掃除をし、どうすれば良き生き方をする事が出来るのか、思惟しましょう。今月は彼岸の先祖供養をする、させて頂く行事がございます。先立して親族を葬った時の事を思い起こしてみましよう。法然上人の御言葉に 命終の時にのぞんで、こころ顛倒せず、こころ錯乱せず、こころ失念せず。身心にもろもろの苦痛なく・・・とあります。果たしてそんな心境で命終を向えてくれたか、おくることができたか、今日や明日やも知れない我等が命です。万民一人といえども死から逃れることはできません。死は仕事も貧富も年齢も全く関係なく訪れます。故に、往生について元氣なうちに考えてみる必要があります。と思ひます。生みの苦しみを母親に与えてきた私達です、死の肉体的苦しみは自分で受け持つて行くのはあたりまえです。しかし心は阿弥陀様に迎えられて次の世界へ極楽への往生を願うことにあります。法然上人の御言葉に 往生極楽のためには南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞとおもいとりて申す外には別の仔細候はず」とあります。浄土宗は念佛往生を提唱しています。それも他力本願です。阿弥陀様を信じて、お念仏を称えておすがりすれば阿弥陀様が必ず極楽に往生させて下さるといふことです。信心が心の安らぎを生みます。

浄土宗の宗歌に 月影」があります。月影のいたらぬ里はなけれどもながむる人のこころにぞすむ」は念佛衆生摂取不捨のこころを詠ったものです。法然上人が自力の教えから他力の念佛往生を根本にお開きに成ったのが浄土宗です。この月影を私が解釈致しますと、月自体が光を発する事はできませんが、太陽の他力によって自らを光らせることができることを証明し、それを見届ける人の心、信心の姿として心に曇りが無い様にと法然上人が詠まれたのだと想像します。我々には自我が存在しますが、此の世に生まれた以上、色々な形で様々な他力、援助の下で生活を支えられて生きていけるわけです。自然と人間の共存、人間同士の助け合い、共に生存して行く方向に道筋を立てましよう。少しの利害が大きな被害を生む事に成りかねません。一歩引く事があってもいいではありませんか。二十六年三月一日